

■小松帯刀 薩摩藩家老。藩政改革に尽力、朝廷・幕府・雄藩を巻き込んで大政奉還を実現させるも、維新直後に病没した。

こまつたてわき

滑稽+人情本 1835=

薩摩国喜入で、在地領主肝付兼善の六人男子の三男に生まれる。母は島津久貫の娘。幼名尚五郎。坂本龍馬と同年生まれで、のちに、肝胆相照らす仲になる。

大塩平八郎乱1837= 2歳：

薩摩藩では島津本家、分家を別格として、在地領主が家臣団トップの家老を務め得る身分で、

異腹の長兄が肝付家を相続、次兄は相良家を相続、すぐ下の弟は夭折するなか、父が短気で人の話を聞かず、乳母も短慮で父母となじまかったため、幼少時は、不幸であったが、薩摩の剣術示現流を学び、

馬術に優れる肝付家の伝統を受け継ぐとともに、演武館で修練を積み、

天保改革終・1844= 9歳：

初めて、藩主島津斉興に拝謁し、弓一張を進上。

阿部正弘首座1845=10歳：

溺愛されなかつた故に、周囲に配慮する人柄になり、才知に優れ、親孝行でもあったことから、

・・・ 1848=13歳：

この頃には、両親からも大事にされて、儒学を造士館助教横山安容に学び始め、

北斎没・・・ 1849=14歳：

藩主斉興の後継をめぐるお家騒動、斉彬派が処断される嘉永朋党事件がおきるなか、“志学の精神”に目覚めて、昼夜勉学に励み、弟たちにも勧めているが、もともと強健ではなかつたようで、

尊徳報徳論・1851=16歳：

幕閣の援助もあって、斉彬が11代藩主になった年には、“多病の身体”になって、母の勧めで、年に2,3回湯治に通うようになると、そこで、身分の異なる人たちの話に耳を傾けて社会勉強、やがて、一人で、四方の名士と交流するようになって行くとともに、幼年から八田知紀に歌道を学んで、歌人として知られるようにもなり、後に、雄藩のなかでも特別に強い関係のあった公家社会と接する資産になる。

ペリー来航・1853=18歳：

安政大地震・1855=20歳：

斉彬が西郷隆盛を大抜擢した年、奥小姓・近習番に任じられ、江戸詰めとなって初出府するが、同国吉利の名門領主小松清猷が急逝し、斉興の命ですぐ帰藩。その往復に、楽しさ溢れる「旅日記」も書いている。

松下村塾・・・ 1856=21歳：

清猷の喪が明け、その嗣養子として、清猷の妹千賀と結婚し、家督を相続して詰衆になる。墓参りのため吉利に赴き、霧島栄之尾温泉で湯治後、兄妹の父も病死。

五ヶ国条約・1858=23歳：

小松帯刀清簾と改名し、急逝した斉彬の葬儀に定火消として参列、子の忠義が藩主を継ぐ。斉彬の異母弟島津久光に拝謁後、当番頭・奏者番に任じられ、エリートコースに乗る。

桜田門外変・1860=25歳：

領内視察の忠義送迎のため、吉利に初入部式。台場勤務を命じられるも、足痛により特例が許可される。久光の権力基盤{誠忠組}リーダー大久保利通が初めて来宅し、親交が始まる。

遣欧使節・・・ 1861=26歳：

長崎に出張し、操艦など軍事技術を習得し、忠義臨席のもと、研究してきた電気水雷術を実演して成功し、賞されるなど、技術面でも能力を発揮し、公式に国父になった久光に抜擢されて、側役になり、{誠忠組}からは、早くも首席家老に匹敵する人材であると期待され、入鹿した元福岡藩士平野国臣と面談し、

生麦事件・・・ 1862=27歳：

復帰した西郷隆盛が来宅、久留米を脱藩してきた真木和泉と面談するなど、幕政改革運動を開始。御旅御側御用人として、久光の率兵上京に随行して、御側詰・御側役に任じられ、勅使大原重徳警護の久光に随行して、江戸では家老並みの扱いを受け、足痛ゆえ幕府から乗物を許可されている。久光が一橋慶喜・松平慶永と会談後、京に戻るに際し、生麦事件が起きる。帰藩して、久光から刀などを拝領後、江戸の斉彬の二人の姫の警固して帰鹿後、家老、御側詰兼務に進み、軍事、産業等の掛を担当。

8月18日政変 1863=28歳：

薩英戦争が起きて、藩論沸騰するなか、最初に講和を言明し、強藩をめざして、長崎でアメリカ領事ウォルシュと大砲・汽船の入手を折衝して成功、慶永の使者で来鹿した由利公正ら福井藩士を応接し、勝海舟に名を知られる。久光に随行して入京し、使者として大津に慶永を、大坂に慶喜を訪ねて、諸侯打合わせに朝議参加を提案するなど、久光の信頼も強固なものになり、

禁門の変・・・ 1864=29歳：

久光が参予に任じられる。貞姫内婚の功で近衛家から家紋使用を許され、將軍からは、国事に尽力したとして御紋付き袴などを拝領。城内で勝に会い、五代友厚の上海行きをはかり、土佐・越前・久留米藩士らと、朝廷に長州征討令を迫ることを協議、禁門の変になり、慶喜に協力して、久光名代として西郷と薩藩軍の指揮にあたり、“馬術の達人”として評判になり、長州軍の撃退に成功すると、京で対長州寛大措置の周旋を進め、勝塾の人材を大坂藩邸に潜居させ、

薩摩藩士密航1865=30歳：

側室琴との間に安千代が誕生。西郷と土佐の坂本龍馬を伴って京を発ち、帰鹿後、長崎で、伊藤博文・井上馨と会談して長州藩への協力を約し、井上を伴って帰鹿。西郷と兵を率いて上京途中、長崎で長州藩のユニオン号購入を斡旋し、大坂で慶喜と会談するなど、薩摩藩を代表して、八面六臂、融通無碍の活躍、

薩長同盟・・・ 1866=31歳：

町田申四郎を養子とする。疲労のためか、一時栄之尾温泉に滞在。海軍掛(集成館・開成所・他国修業等掛兼)を命じられ、軍備のため予算制度を実施し、海軍規則を定める。来鹿したイギリス公使パークスを接待。総髮願いが許される。*自邸で、龍馬の立合いのもと、西郷とともに、長州藩士木戸孝允と薩長盟約を結ぶと、西郷とともに上京し、老中板倉と、続いて、新將軍慶喜側近の原市之進・梅沢孫太郎と会談。

大政奉還・・・ 1867=32歳：

城代家老(役料一千石)、陸軍掛(造士館・演武館等掛兼)に任じられる。足痛の続くなか、西郷らと英艦にパークスを訪う。久光に随行して入京すると、*西郷らと土佐藩士後藤象二郎とのあいだに薩土盟約をむすび、土藩の後藤、芸州藩の辻将曹らと、二条城で、將軍徳川慶喜に大政奉還を進言し、参内して沙汰書原案をつくり、実現に至るのちに慶喜が、大久保、後藤、勝を超える“非凡の才”の筆頭であったと回想し、イギリス外交官アーネスト・サトウも、日本人のなかで一番魅力ある人物であったと記しているように、維新を導いた軸であったといえよう。

明治維新・・・ 1868=33歳：

*内乱を回避したい諸侯から再登板を期待されるも、足痛のため応じられなかつたようで、戊辰戦争になってしまい、兵を率いて上京。待っていたように新政府では、参与、とくに重要になった対外折衝に関わる外国事務掛、外国官副知事(女蕃頭)に任じられ、外国官知事伊達宗城不在のなか、仏公使晩餐会出席中に土佐藩士によるフランス帝国水兵殺傷する堺事件発生報を受けて処理に奔走し、仏公使、蘭総領事、英公使の天皇謁見に陪席するなど重きをなすが、足痛が激化して、湯治休暇帰国が許され、米船で横浜を発ち、大阪にもどり、大久保らと版籍奉還につき協議したのを最後の仕事として、

戊辰戦争終・1869=34歳：

帰藩。領地・家格返上を願い出、全職を免じられ、政府から賞典禄千石を授けられる。オランダ人医師ボードインの治療を受けるため、再び大阪に向かうが、新たに、下腹部の腫瘍が露見、すでに末期症状で、

初の日刊新聞1870=35歳：

上阪した正室千賀と看護にあっていた側室琴と間の和解が成立して、関係者が安堵し、大久保、木戸が見舞いに訪れるなか、遺言書を作成し、天皇下賜の品が大坂府知事から届き、太政官から全快次第東京居住を命じられるも、没した。